

「私、虐待しています」告白して家族再生

子どもへの虐待が止まらない。なぜ、わが子を傷つけてしまうのか。母親も苦しんでいた。立ち直るきっかけになったのは、受け止めてくれる人の存在だった。(机美鈴)

NPO運営支援者に



大阪のベッドタウン、大阪府富田林市。古い2階建て民家から子どものはしゃぐ声が聞こえてくる。1階居間では母親が子育て談議に花を咲かせる。市内の岡本聡子さん(37)が2003年、仲間とつくったNPO法人ふらっとスペース金剛の「ほっとひろば」。週6日、4、5人のスタッフが常駐し、育児相談に乗る。

11年前の春、岡本さんは

「ほっとひろば」で利用者の赤ちゃんの世話をする岡本聡子さん。大阪府富田林市寺池台1丁目、机写す

夫の転勤で大阪から東京に引っ越した。長女は4歳、次女は5カ月。次女はアトピーがひどく、体中をかきむしってぐずるのを一日中あやした。母乳に影響するため、食生活では卵・牛乳・大豆・小麦を抜き、30分台までやせ細った。

矛先は長女に向かった。ちよっとしたことでも足や尻をたたいた。「お母ちゃんは鬼になった」。長女はそう言うて、おねしょや夜泣きを繰り返すように。慣れない土地で相談相手はいない。夫に「会社という逃げ場があつてええなあ」と食ってかかった。

その年の7月下旬、マンション8階のベランダから外を眺めた。富士山がきれいだった。「飛び降りたら楽になる」。両脇に2人の子を抱えたが、それ以上力が入らない。「なんて母親なんや」。その場に泣き崩れた。

子どもを連れて行った病院で、ソーシャルワーカーに「私、虐待しています」と打ち明けた。「思い詰めないで」との言葉に気持ちちが楽になった。週2回家事代行を頼み、夫も家庭と正面から向き合うように。次女の症状も改善して余裕を取り戻す中で、「壊れかけた家族を再生できた」。

01年に大阪に戻り、通信教育で社会福祉士の資格を取って「ふらっとスペース金剛」を立ち上げた。法人の運営するひろばは4カ所に増え、1日40組以上の親子が訪れる。

「水の怖さをわからせるために浴槽に沈めた」「たばこは危険だと教えるために火を押しつけた」。そう話す母親らを否定せず、「しんどいねんな」と耳を傾け、不適切な行為に自ら気づかせる。悩む親にかつての自分を重ねる。「苦しんだけど、その経験が私の血や肉になっている」。「煮詰まってしまう前に、SOSを発信する勇氣を持って。そして、周りの人は非難せずに受け止めてあげてほしい」